

子どもをどうとらえるか (最終会)

— 県教研「能力発達」分科会十年間の論議から —

片岡 弘

三 子どもの「可能性」を引き出す教育実践 (続)

(三) 自主参加による「学力の底上げ」

前述したように一九七〇年代の後半には、激増する非行と著しい学力格差が大きな社会問題として浮上してきた。

「数学の中間・期末テストで、学年平均が四〇点未満、〇点の生徒が一〇名近くいる」

「半数を超える生徒が、小学校の算数がわからない」「二〇〇人の中学二年生のうち、一三人はかけ算九九が定着していない」「漢字も満足に読み書きできず、読解力が低いためどの教科でも授業を進めるのに困っている」「第九次(『新潟県の教育』)等々、中学生の学力の実態が報告され「基礎学力のついていない生徒が、生活面でも、もっとも崩れや

すい」(第二九次・「能力・発達」分科会〓岩船代表)という具体的な事例も紹介されるようになった。

こうして多くの中学校で非行克服へのとりくみの過程で「非行の根には(低学力)の問題がある」という認識が深められ、第二七次〓三〇次の教研では、「学力の底上げ」を計る実践が相次いで報告された。

(ア) 亀田中学校のとりくみ

新潟市のベット・タウンとして急速に都市化が進んだ亀田地区は、例外なく地域の荒廃と非行の増加に悩まされた地区である。

亀田中学校では、生徒の一人が盗んだバイクで特急電車にぶつかり即死するという事態に直面する。

この痛ましい事故がきっかけで、ここの教職員集団は、自

校の教育に対する総点検をすることで一致し連日討議を重ねた結果、

①生徒の自治活動を発展させること

②生徒に学校の主人公だという自覚を持たせ、その中で非行克服を図ること

③非行の温床ともいえる「低学力」の克服に努めることの三点で合意し、以後の具体的な取り組みを始めたという。

まず、教職員集団の意志統一による学校の民主的合意を広げ、豊かな学力をつけるために、「教職員の話し合いによる、主任や校務分掌の民主的選出を基礎に、全教職員が一致協力して生徒の集団づくりに取り組み、またそのために必要な学習会と実践の交流会を重ね」た。あくまで生徒の自治活動を重視し、生徒会主催の集会や行事を成功させていくなかで、生徒会は、①バイク、自動車などの無免許運転の追放、②暴力の追放、③飲酒・喫煙の追放の、「非行三悪」追放宣言を採択する。

一方、非行「低学力と結んだ」とらえ方の中で、教職員集団は、通知表に到達度評価を導入するなどして〈受験体制〉からの脱却をめざす努力をし、まったく自主的に参加できる「勉強会」と名付けた、「落ちこぼし」を底上げする「〈底上げ講座〉を、年間二十五回開設した。「勉強会」には、三年生十学級のうち八十人が参加したという。(二十九次県教

研・三市中浦支部―高橋作衛氏の報告より)

(イ)新津第五中学校のとりくみ

新津第五中学校では、「学校行事、特に合唱コンクールではすばらしい良さを発揮する生徒たち」を、毎日の学習に真剣に取り組むようにするにはどうしたらよいか、大きな話題となり、特に「授業についていけない」生徒への対策」が、くり返し、教職員集団で論議された。その結果、「その意義については、必ずしも全員一致した理解には至らなかったが、『底上げ』についてのとりくみでは一致し、夏休みに、全員の協力で『夏休みの学習室』を開設」した。ここでも予想以上の参加者があり好評だったので、休みが終ってから継続することを決め、毎週一回開設することにしたという。(二十七次県教研・三市中浦支部―石井哲夫氏の報告により)

(ウ)京ヶ瀬中学校のとりくみ

「夏休みが終って二学期に入ると間もなく、自転車の盗難、その自転車を分解して友達への売買が発覚……盗難の範囲は、新津、新発田にまでおよび、自転車台数三十九台にも及ぶ事件が発生したが、「この非行に関係した生徒は、いずれも基礎的な学力に欠け、ふだんの授業にはほとんどついてくる事のできにくい生徒」であった。

京ヶ瀬中学校の教師集団はこの事態を重くとらえ、「子どもは一人の人間として尊重されなければならない」ということをあくまで基本において、緊急克服策の重要な柱の一つ「おくれた子どもたちへの手だて」を掲げ、学年単位で、国語・算数・英語の学力補充に力を入れることにした。(七年)

翌七八年には、父母からのアンケート(「学校や先生方のぞむことは何ですか」の問いに、一九一名の父母の回答中一二〇名が『おきている子、わからない子に放課後など特別に教えてほしい』と回答)をもとに、基礎学力向上のため、国語、数学、英語の三教科についてそれぞれ到達目標を設定し、「学力向上テスト」と放課後の特別指導を実施した。

「ぼくは、このきを学力こうじょうテストに、こうおもつ。ぼくは、学力テストをしてよかったと思った。それは、小学校のときにならった分数がわからなくなっているときに、この学力テストが始まった。始めは、学力テストを、したってしようがないと思っていた。それをやっているうちに、わすれていたけいさんを思いだした。」これは「毎週不合格で『学習会』に参加している生徒」の作文だが、他の生徒の反応も圧倒的に良く、学級づくりや班員の協力、家庭学習も進んできているということである。このとりくみについてある母親は次のようなたと

りを学校に寄せてきた。

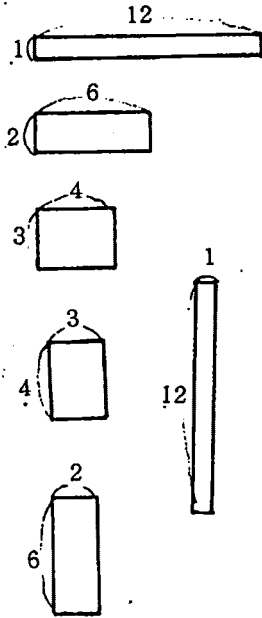
「『クラスの班員の一人がテストに合格できないから、これからその人の家に行って勉強を教える』と出て出かけたことがあります。このほかにも合格点に達しなかった人に、班員が全員で勉強を教えたということも聞きました。人の情が薄れていると言われる現在の子供達に、わからないで困っている友達に手をさしおいてやることを教えて下さいまして有難うございました。」(二八次県教研・北蒲原新発田支部 長谷川正熙氏の報告より)

学力の「底上げ」を図る以上のような取り組みは(今私の手許にある例だけでも十指に余るほどある)前にも述べたように、すべて、それぞれの教職員集団が非行克服への道を探るなかで見出し、集団の合意で取り組まれた実践であるという特徴をもっている。それらは(偏差値輪切り)といわれる今日の中学校における教育のあり方を改めて見直そうとする、教職員団体の質的な高まりを実現させ、「ひとつには『わかる授業』をどう創り出すかという課題と結び、さらには、生徒自身の自治活動能力をどう育てるかの課題と結んで、生徒の主体に訴えて『学力の底上げ』を図ろう」(二次県教研・新潟東石山中・半戸義雄氏)とする観点を生み出した貴重な実践の数々である。

(四) 楽しく「わかる」授業の創造

その一

「生気ない授業は教師の責任と常に思い続けて来た。当然である。しかし、私は今この一年をふり返り、教師の力量(指導技術)だけで授業は楽しくなるか、という疑問につき当っている……」 新潟支部の高橋武昌さん(当時丸山小学校)はこう前置きして、「学習とは子どもにとって何だろう」と問い直す。高橋さんは、五年生の算数「約分」「通分」「最大公約数」「最小公倍数」「分数の加減」などの例を引き、「教科書の教え方があまりにも難しく、子どもに興味と関心に根ざしていない」として、例えば約数の探し方であれば、「一步教科書から離れ、面積に置きかえて図(図①)かきながら、(たて×よこ)の関係で教えたら、とてもよくわかった」例を報告した。



六年の国語の教科書(光村)に「短歌、俳句を読もう」という教材があって、「東の野にかぎろひの立つ見へてかへり見すれば月かたぶきぬ」という柿本人麿の歌が載せてある。「……一体この歌をどのように指導したらよいのだろうか。教科書には、『東の方の野に、よあけのうるわしい光線の立つのが見える。ふり返ってみると、西の空にはもう月がかたむいてしまっている。広々とした夜明けの雄大な景色が想像される歌である。』とあるが、それは六年生の子どもに何に刺激を与え、どんな興味と結びつき、どのような内容が身につくというのだろうか……漢字と文法と、そして国語そのものに問題の多い子どもたちに、古典は必要なのだろうか……」子どもをリアルに見つめる高橋さんの教科書に対する疑問は尽きない。

そこで彼は、「昭和の方葉集」といわれる「朝日歌壇」の歌を授業に取り込む。子どもたちは、「戦後の日本を必死で生き抜いた人間」の生き様に「おれじーんときたぜ」と、強い関心を示したという。授業の後、子どもたちは自らの実感で、次のような感想を書いた。

さかさまにはられし切手目にしみて父の老い知る死刑囚のわれ
島 秋人

◆この短歌をつくった島さんは、人を殺したことを後

かいていると思います。このように父を思う心があるなら、つみをおかさなかつたらしいと思います。ほか島さんなら、いつも死ぬことにおびえていて、短歌なんかとてもつくれないかもしれない。(真樹)

はく子みな平和に愛にみたされよそを願いつつベビー靴をぬう
綾 勝子

◆この歌をつくった人は、子どもが戦争とかで死んでいないと思う。自分がつくっているベビー靴をはく子が、自分の子と同じようになってほしくないという願いをこめている。親はみんなそう思っていると思う。自分の子は、かわいいけど死んでしまったら、ほかの家の子は不幸になってほしくないと思う、すばらしい気持ちがわかる。(恭子)

高橋さんは、さらに、「身体を通して人間がわかり合える」喜びを、また、「技を媒介にして人間的なつながりを深めることのできる」自信を子ども達に持たせたい——それは、「すぐれた文化の質にかかわっている」という基本に立って、図工の授業などでも、とかく落ち入り易い技術主義を戒め、「今(こ)こで、どういう子どもを育てなければならぬのか」と自問する。

「学校で交わす子どもたちの会話は、まるで生活からはなれたマスメディア的な言葉で貫かれ、いかにも楽しくすばらしい世界のように語られる。

しかし、生活に根ざした子どもたちの認識は変らない。教科書が……というより、教師の『自立』にかかわる問題かも知れない」

彼は子どもたちに「しの笛」作りを教える。「亀田甚句」の踊りに挑戦する。「タルたたき」を教える……こうして「亀田甚句の踊りの絵」が生み出される。この絵を通じて、地域とのつながりを学び、授業の中で父親のことが語られるようになる。

彼は言う。

「……できない子、わからない子が生まれる主原因の一つ、教科書にある」と。

地域に根ざし、生活に根ざした教育とは、まさに、そうした視点からの教育内容の「自主編成」からしか生まれぬ。高橋実践の底流には、「自主編成とは『自分がやりたい人間教育』であり、その保障がないところに、『楽しくわかる授業』は成立しない」という確信がある。(三三三)次県教研・新潟支部||高橋武昌氏の報告より)

その二

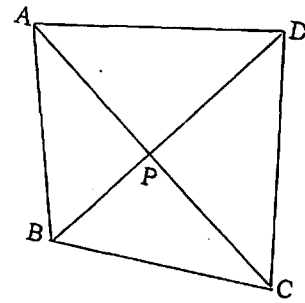
「とまとして／はじめは あおかったけど／ あかいろに

なった。／とまもとに しょうどくしたり わらをおいて やったりした。／むしが くって しまうので、／じょうろに、／しょうどくを いれて、かけて やった。／とまとを もぐ ときは、とまとを もって ねじるとよく とれる。」

佐渡支部の修理重一さん(内海村中学校)は、坂元忠芳氏(都立大学)の著書からの引用であることわって右の詩を紹介し、「わかる」ということの基本は、「体を動かして自ら体験すること」を土台にしていくことであり、従って「新しいことを学習するということは、今までの生活経験や学習経験の必要な部分をとり出し、それを新たに組みたてていくことでもある。このことは、抽象的な文字や数字を具体的な経験に結びつけることを必要とするし、また逆に経験を文字や数字に抽象化することでもある」と述べる。彼は、小・中併設の分校で、免許教科外の数学を教えることになるが、抽象的な数量の世界を、子どもたちの実生活とどう結びつけたらよいか模索する。

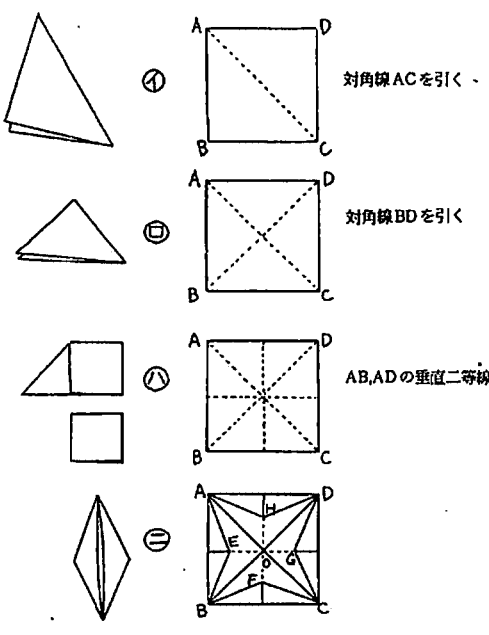
「四角形ABCDは、四すみを折り返し各頂点をPに集めることができる。その時、折れ目は各辺のどこを通り、角APBは何度になるか」(図②参照) 中学二年生の問題だが、この問題にとり組んでいく過程で、ふと、長方形で「つるは折れないか」という課題を見付ける。

そこで、先ず、正方形でつるを折らせ、折る過程を分解



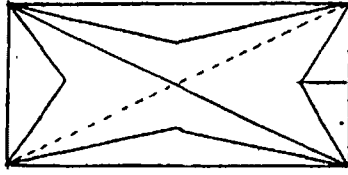
して、折れめに線を入れさせる。

(図③参照) ①②③のように、折っては開いて線を引き、また折るといふ作業をくり返させ、谷線と山線を区別させたら、②のようになった。ここでは、AHやAEがどん



な線分かも考えさせる。（それぞれ、角D A O、角B A Oの二等分線である）

次に、長方形に、図③の②にならって線を引かせてみた。図④として、正方形の折り方にならない、線の通りに一度に折り込ませたら、みごとに、長方形で折ったつるができた。生徒たちが喜んでこの学習にとり組んだことは言うを待たない。（不等辺四角形や三角形に挑戦した生徒も何人かいたという。）



修理重一氏の報告より）

その三

中学一年生の自然認識ほどの程度のものか……試しに「生物だと思つものに○をつけなさい」とアンケートしたら、結果は次のようであったという。（調査人員四二、カッコ内数字は○の数）

修理重一氏の報告より）

- イヌ（7）、ハト（8）、ヘビ（3）
- ミミズ（3）、トンボ（1）、サクラ（3）、イネ（3）、ライオン（7）、フナ（1）、ソウリムシ（3）
- 同じく、「動物だと思つものに○をつけなさい」では、ライオン（4）、イヌ（4）、ハト（1）、ウサギ（3）、ヘビ（8）、カエル（6）、ミジンコ（2）、トンボ（2）である。

岩船支部の森川信夫さん（関谷中学校）は、「メダカやフナは魚であつて動物ではない、バッタやトンボは昆虫であつて動物ではない」という子どもたちの認識の実態、さらには、「アサガオでは、花から種子ができることはわかるが、キクになると種子はできないと思つている子が半数以上もいる」実態をふまえて、自主プランによる生物の授業の実践を報告した。先ず、「生物界におけるあらゆる発達段階で、また生物界のどの階層においても、等しく存在しているもつとも基本的で本質的な法則を軸にして」授業を組み立てなければならぬとして、その法則性がどのような現象を通して認識できるかを次のようにとらえる。

- すべての生物は呼吸をしている。（ミミズは息をしているか、どうか）
- すべての生物は栄養を必要とする。（オタマジャクシはウンコをしているか、どうか）

・すべての動物は食物を食べて栄養をとっている。
 ・すべての植物は光のはたらきで栄養をつくって生きている。

・カビやキノコは特殊な植物である。

○すべての生物はふえる。

・ニワトリはニワトリの卵から生まれる。

・イネはイネの種子から生まれる。

○生物界のなりたち

・食物連鎖

以上のことを貫ぬく基本的概念は「進化」である、と。そして、「生物教育で大切なことは、博物的知識をたくさん教えこむ、個々の事物をこまぎれにたくさん教えこむことではなく、生徒たちに正しい科学的生命観を持たせ、自然に対する科学的認識の基礎がしっかりと身につくようにしなければならぬ」として、中学一年の生物の授業の年間計画を別表のように立てた。

実際に授業を進めるに当たっては、例えば「植物が呼吸をしている」ことを、大根のタネの発芽実験を通して具体的にわからせる工夫をしたり、「消化器管」の学習では、生徒にミミズをとってこさせて解剖、観察させたり、また、近くの養い場からニワトリを買ってきて、用務員さんにも手伝ってもらってその消化器管をとり出して見せたりしている。

生徒はニワトリの消化器管の長さに驚くなどこうした授業のなかでは、みちがえるほど生き生きしていたという。森川さんは、「生徒に意欲をもたせる課題づくりがいかに大切か、この授業を通じて思いしらされた」と、報告をしめくくっていたが、子どもの自然認識の実態をふまえ、子どもたちの生活実感と結びつけながら意欲を喚起して、科学的認識の基礎をきちんとつけようとする、意欲的な実践の一つであったと評価できる。(三二次県教研・岩船支部・森川信夫氏の報告より)

その四

「校区に『舟山』というところがある。校区内を流れる田河川から、少し高くなっている地域である。戸数二十四戸の小さな村落であるが、なんとそこに、五か所のため池がある。子どもたちのため池のことを聞いても、『さかなのいる池』『魚つりにいく池』くらいにしかとらえていない……」北魚沼支部の目黒和男さん(原小学校)は、四年社会科で、「舟山―ため池―用水を探る」という単元を設定した。「地域の人たちの生産や生活と結びつけて、舟山のため池、用水をとらえさせよう」と意図したからである。

学習計画は次のようにたてられた。

①なぜ舟山にため池が多くあるのか。

教科書 (学校図書) では	自主プランでは
<p>I 身近にみられる生物の生活</p> <p>II 植物の生活と環境</p> <p>1 日なたで育つ植物</p> <p>2 日かげで育つ植物</p> <p>3 水中の植物</p> <p>4 光を必要としないキノコやカビ</p> <p>III 動物の生活と環境</p> <p>1 背骨をもっている動物</p> <p>2 背骨をもっていない動物</p> <p>IV 生物の系統と進化</p> <p>1 生物を似たものどうして分類する</p> <p>2 生物の世界のうつつりかわり</p>	<p>I 身近にみられる生物の生活</p> <p>II 生物</p> <p>1 生物と無生物</p> <p>(1) 生物と無生物</p> <p>(2) 生物はみんないきをしている</p> <p>2 生物と栄養</p> <p>(1) 動物と栄養</p> <p>① 植物と消化器官</p> <p>② 捕食と動物の運動</p> <p>③ 無セキツイ動物とセキツイ動物</p> <p>(2) 植物と栄養</p> <p>① 植物は自分で栄養をつくる</p> <p>② 植物と水</p> <p>一かわった植物・カビ・キノコ</p> <p>③ 微生物も生物である</p> <p>3 生物と繁殖</p> <p>(1) 動物の繁殖</p> <p>① 自然にわく生物はいない (その1)</p> <p>② 動物とたまご</p> <p>(2) 植物の繁殖</p> <p>① 花と種子</p> <p>② 胞子植物と種子植物</p> <p>③ カビも自然にわくのではない</p> <p>④ 植物と種子</p> <p>4 生物の進化と系統</p>

㊦ 地図から読みとろう。

㊧ 舟山の上の池から用水路をたどる。

㊨ 用水路を地図に記入する。

㊩ ④のところで、だれが、何のために作ったのか。

㊪ ㊩のように役立ち、地域をどのように変えたか。

「河岸段丘で、川が下の方を流れている。」

「川と川にかこまれているが、地形が高くて、水がない」

「家の人に聞いたんだけど、林の中に穴を掘って水を得たという。その名こりて、水林という地名も残っている。」

「林の近くや、ちょっとした小高い丘の下に何度も穴を掘って、わき水のあるところに家を建てたり、ため池を掘ったそうだ。」

「水がしらとか、清水という地名も残っている。」

「舟山で一番古い家に行って聞いたけど、その家には水の神様を、代表してまつているそうだ。(その家は、池っぱたという屋号である)」

「池の近くに、神社や石仏が多くある。水に関係のあるものが多いそうだ。」

等々、子どもたちが様々な情報を集めてくる。そこで、いよいよ、「上の池の水が、どこを流れてどこまで行くか、四年生二十二人で歩いてみよう」ということになった。

上の池を出発すると、水路は二つに分かれている。そこ

で、十一名ずつの二組みに分かれることにする。先に行つて水路が分かれたら、同じように分かれることにする……。

草をかき分け、かき分け、用水をたどっていく。ある組は遂にスポンをまくって、用水の中をジャブジャブ歩く。そしてやがて、稲刈りの終わった田の中に、散り散りに子どもたちは散ってしまった。けれども、しばらく行くと、それぞれの組の合流が始まった。そして、「通称「下の池」で、二十二名全員が合流した。

「なあんだ、みんないっしょになるのか。」「どうしてだろう。」

子どもたちには、なぜそうなっているのかわからない。しかし、静かになった時、ブーンというモーターの音。音のする方へ行くと、そこにポンプ小屋がある……。

「上の池」から、用水がいくつにも枝わかれして、子どもたちが今通ってきた田をうるおした水は、全部「下の池」に流れ込むようになっていいる。そして「下の池」の水は、ポンプアップされて、パイプで「上の池」に送られているのである。

「同じ水を何回も使っているー」子どもたちの驚きは大きい。「この舟山では、水はすごく大切なんだね。」という子どもの発言にも実感がこもる。調べていくうちに、水をおいて「上の池」まで運んだこともわかった。生産を高めるために、地域の人々が必死で努力した姿を、子どもたちは

しっかりと自分の目で確かめた。

コメント無しでも、誰もが納得のいく授業の「コマだと言えるだろう。(三五次県教研・北魚沼支部)目黒和男氏の報告より)

「子どもをどうとらえるか」という大きなテーマで、県教研「能力・発達」分科会での十数年間にわたる論議を、私なりにまとめようと試みてきた。連載四回、四百字づめ原稿用紙で百枚を超える紙数を頂いたわけだが、書き残してしまったことも多い。大きな柱で言えば、「子どもの心と身体」のこと、「生活リズム」のこと、「教育評価と通知表」のこと、「いじめや非行克服」のことなどがある。また、本稿で紹介した教育実践についても、紙面の関係で、それぞれについて十分な記述ができず、実践者の真意を伝え得なかった面が多々あるだろうと思うし、まだまだ多くの実践例を持ち合せながら、それらを紹介できずにしまったことを残念に思う。それらを書き残したことにしては、また何かの機会に、新たな視点から見直して、論じてみたいと思っ

(岩船・金屋小学校)